

特別支援教育における電子掲示板を利用した学校間交流の取り組みと地域での展開に関する一考察

島田勝浩*1・小塚雄一郎*2

〈概要〉本研究では、特別支援教育における遠隔協働学習ネットワーク「チャレンジキッズ」への参加と、その石川県内におけるローカル版として位置づけて運用を開始した「石川ゆうゆうネット」における学習事例を分析する。また「石川ゆうゆうネット」運用に関して生じた諸問題に関して考察する。

〈キーワード〉特別支援教育, 遠隔協働学習, 電子掲示板, コミュニケーション, 地域展開

1. はじめに

国立大学法人金沢大学教育学部附属養護学校（以下、金沢大附養）と石川県立七尾養護学校（以下、七尾養）はともに滋賀大学教育学部附属養護学校（以下、滋賀大附養）にメインサーバーを置く、特別支援教育における遠隔協働学習ネットワーク「チャレンジキッズ」に参加してきた。当初は、ともに滋賀大附養のサーバーにそれぞれがクライアント接続して利用していたが、2001年度より金沢大附養に専用サーバーを設置し、現在では七尾養もこれを經由して参加するようになった。

これを機に、チャレンジキッズへのこれまで通り参加するとともに、石川県内におけるローカル版チャレンジキッズとも言えるネットワークの構築を模索し始め、会議室設置等の実験期間を経て、2003年度より「石川ゆうゆうネット」の本格運用を開始した。

本研究では、このチャレンジキッズ、および石川ゆうゆうネットにおける、金沢大附養と七尾養の実践の分析を、太田(2003)が採用したグラウンデッド・セオリー・アプローチによる発話の質的分析などにより行い、実践に関わった生徒の変容などを考察していきたい。また石川ゆうゆうネットを運用する上で見えてきた課題について考察していきたい。

2. チャレンジキッズでの実践事例

(1) 実践の概要

金沢大附養の高等部1年（当時）Sが、選択教科「情報」の時間にチャレンジキッズ上に書き込んだ自己紹介は、次のような内容で

あった。

Sと言います。
金大附属養護学校の高等部1年生です。
テニス部です。
ゴダイゴ好きです。
よろしくお願いします。

この書き込みに対して、その翌日には和歌山、香川、佐賀の4人の先生が返事を書いてくださった。Sの書き込みに「テニス部」と「ゴダイゴ」という2つのことが書かれていたため、返事の内容もそれに対しての各自の経験や感想であったが、その中のひとつに次のことが書かれていた。

〈A先生の書き込み〉
ゴダイゴのミッキー吉野って、しまだ先生に似てるでしょ？
しまだ先生をロングにしてみたいじゃない？

〈それに対してB先生から〉
それは似てると思います。
ばっちりだ！

Sがこれらのやりとりを確認したのは、自分の最初の書き込みから1週間後の情報の時間であった。いくつもの返事があることに嬉しさと驚きが入り混じったようなはにかみの笑顔を見せ、ひとつひとつに返事を書いた。特に興味をもったのが、先述のミッキー吉野と島田が似ているという発言であった。

Sはこれに対して次のように返事をした。

A先生、B先生、お返事ありがとうございます。
さっきホームページでミッキー吉野の写真を見ました。
島田先生にそっくりでした。

*1 SHIMADA, Katsuhiko: 国立大学法人金沢大学教育学部附属養護学校 e-mail= shimada@kanazawa-u-sh.ed.jp

*2 KOZUKA, Yuichirou: 石川県立七尾養護学校

ホームページを開き、ミッキー吉野の写真を確認した瞬間のSの顔は、これまでに見せたことがないような嬉しそうな、というより「にやけた」表情だった。

(2) 実践の分析とSの変容

Sは高等部になって金沢大附養に入学してきた生徒である。今回の実践が行われたのは10月から11月、つまりSが入学して半年という時期である。

Sは人前で話すのが苦手であった。4月の新入生歓迎会で自己紹介をした際にも、結局最後まで普通に話すことはできなかった。

今回の実践に関わったあと、表現会という学習発表会があり、高等部は劇を披露した。その舞台上には、大きな声でセリフを話すSがいた。

この変容を生んだきっかけはどこにあるのか。もちろんS自身が学校の環境・人間関係に慣れたことなどもあるだろうが、最も大きな要因は、今回の実践で自分が発した言葉が会ったこともない多くの人に認められたことではないかと考える。これに気づいたのは、チャレンジキッズ上でグラウンデッド・セオリー・アプローチによる発話の質的分析を行った結果である。

今回の発話データを、軸足コーディングによるダイアグラムにまとめたところ、下の図のようになった。

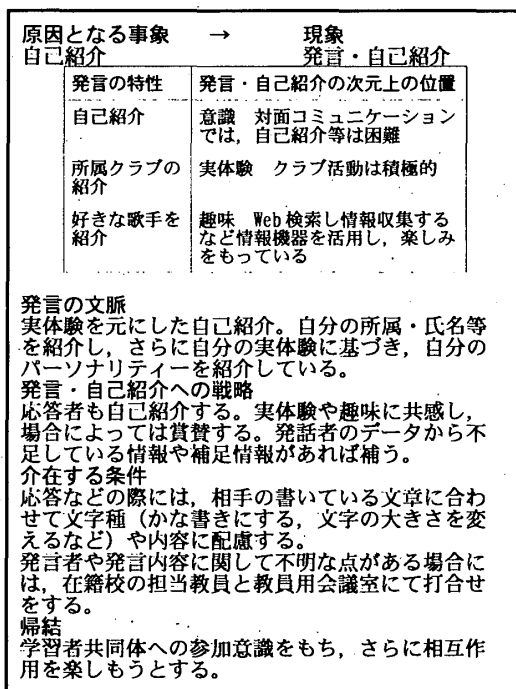


図 軸足コーディングによるダイアグラム

これによれば、基本的に発言-応答のような相互作用であるが、そのなかで自分の好きなことへ

の共感（私もゴダイゴが好きです、私もテニスをやっていた、など）や、日頃の活動に対する賞賛（ラケットにボールをあてるのが簡単だったとはなかなかすごいですね、など）を得て、それにより自分の発言内容に自信がもてたことが明らかになった。

さらに好きな歌手グループのメンバーが自分の身近な存在の人に似ていたという事実を知ったこと、つまり自分が発信した内容が、やりとりのなかで再び自分に近いところへ戻ってきたことにより、チャレンジキッズが身近な存在として感じられるようになったことで、コミュニケーションに対する垣根がかなり取り払われたことも見て取ることができた。

これらの分析により、Sが人前で話す、自分の意見を明らかにすることに対して、今回の実践が大きな契機となったことが分かったのである。

3. 石川ゆうゆうネットでの実践事例

(1) 実践の概要

七尾養の高等部では、総合的な学習の時間において選択講座を開設し、そのなかのひとつとして「なんでもランキング」という実践を行った。

この実践では、身の回りの興味・関心があることについて調査をし、その結果を壁新聞等にまとめて発表するという活動を展開したが、そのなかで「車の色調べ」と「給食アンケート」のグループに分かれて活動を行った際に、給食アンケートを石川ゆうゆうネットを通して金沢大附養でも取ろうということになった。

このグループには、以前から情報の時間を中心に、石川ゆうゆうネットで島田とメールをやりとりしていた高等部1年（当時）のHも入っていたので、Hにアンケート依頼のメールを送ってもらうのが一番スムーズではないかという打合せを教師用の会議室で行っていた。しかしその週になってHが学校を休んだので、急ぎよ高等部3年（当時）のOとUに依頼メールを送ってもらった。

<Uからの依頼メール>
 島田先生はじめまして
 ぼくはUです。
 七尾養護学校高等部3年生です。
 給食アンケートをお願いします

<Oからの依頼メール>
 島田先生はじめまして
 ぼくはOです。
 七尾養護学校高等部3年生です。
 給食アンケートをお願いします
 ファイルを添付しました

アンケート実施にあたって、金沢大附養では行事等の都合で生徒へのアンケートは実施できないことと、七尾養では生徒数が多くて集計が手間取ることが懸念されたため、教師間での打合せの結果、今回は両校とも教員のみを対象として実施することとした。

金沢大附養では、この依頼を受けて、早速アンケートを実施し、結果を七尾養へ送付した。その際、意欲づけなどをねらうため、次の点に留意した。

- ・アンケートを給食の時間に（実際に給食を食べている場面）とること
- ・その様子をビデオで撮影して「こんな感じでしたよ」ということが分かりやすく伝わること
- ・さらに前年度まで七尾養に勤務していた（七尾養の生徒が知っている）教員を中心に映像をまとめて送ること

こうして集められた金沢大附養のデータを七尾養へ送付した。

七尾養養護学校の
Yさん、Hさん、Yさん、Oさん、Uさん、
おまかせしました。
附属養護学校で先生みんな（35人）にアンケートをとった
けっかをお知らせします。
<中略：アンケート結果>
みんな食堂で食べているときに書いてもらいました。
そのときのようすをビデオと写真でいっしょにつけて送ります。
じかんのあるときにゆっくり見て下さい。
このビデオと写真には、みんなの中で知っている人もいると思うけど、
きよねん七尾養養護学校にいたA先生とH先生がうつっています。
A先生はしゅっちょうにいていたので
がっこうにかえってきってから書いてもらいました。
けっかをまとめたら、またおしえてくださいね。
ではまた！

七尾養では、受け取った金沢大附養のデータと七尾養で集めたデータをそれぞれ集計し、結果を壁新聞に発表した。さらに高等部全体で発表会を行い、他の生徒の前で発表した。



写真1 七尾養での壁新聞作成の様子

また、集計結果は、金沢大附養に再びメールの添付書類で送られた。

(2) 実践の分析と考察

今回の実践は、石川ゆうゆうネットを利用して行われた初の本格的な活動である。生徒たちはそれまでにもメールのやりとりなどをしていたし、調べる活動もすでに何度か実施していたが、その2つが組み合わさり、依頼やデータ交換の体験ができたことは非常に大きな自信につながったのではないかと考える。

この実践については、先の事例で用いたグラウンデッド・セオリー・アプローチによる発話の質的分析はまだ実施していない。そのため、分析結果としてはまだ十分なものが得られておらず、今後あらためて分析を行った上で考察していきたいと考えている。

4. 石川ゆうゆうネットの概要と課題

話が前後するが、ここで石川ゆうゆうネットの概要についてまとめておくこととする。

(1) 誕生の経緯

冒頭で述べた通り、これまで金沢大附養も七尾養も、チャレンジキッズに参加してきた。そこでは、特別支援教育に関わるメンバーのみで構成されるネットワーク上の「教室」として、失敗自体が（それこそが）貴重な学習機会であるという共通認識がある。そこに参加する児童生徒たちは、単なる知識の獲得や伝達の学習のみに留まらず、他者とのやりとり・関わりの中で生まれる相互作用を大きな要因として、日々成長してきた。

一方で、各地の特殊教育諸学校・障害児学級では、地域を中心とした交流学習も随時展開されてきた。石川県内でも、各学校・学級が地域の他の小中高等学校と、あるいは地元町内会等と、さまざまな形での交流を実施してきた。毎年5月には県内の知的障害養護学校が一同に会して、スポーツを通して交流を深めようとする養護学校体育交歓会という行事なども行われている。しかしながら、こういった地元ベースの交流は、得てして数回しかない直接会う機会のみであることが多く、年月を経るにつれて形骸化していく、もしくは消えていくことも多くあったように思われる。

大きな効果を得ることができつつも、全国規模であるが故に実際に会うことが難しいチャレンジキッズと、折角直接会えるのに十分な時間が確保できず有効に活かされていらない地域交流、この2つを結びつけることができれば・・・そういう

想いから、地域での、いわばローカル版チャレンジキッズを確立できないかということで運用を開始したのが「石川ゆうゆうネット」である。

(2) 概要

石川ゆうゆうネットのサーバーを金沢大附養に設置するにあたって、以下の3点を主な利用目的として考えた。

- ・これまで関わってきたチャレンジキッズの利用をさらに推進すること
- ・石川県内の特別支援教育関係者がこれまで以上に深い結び付きを構築できること
- ・金沢大附養の学校教育データベースとして、校内での指導情報を蓄積すること

これらの目的を達成するため、次の写真のようにチャレンジキッズ用、石川ゆうゆうネット用、そして金沢大附養校内用の各種会議室を設置することとした。

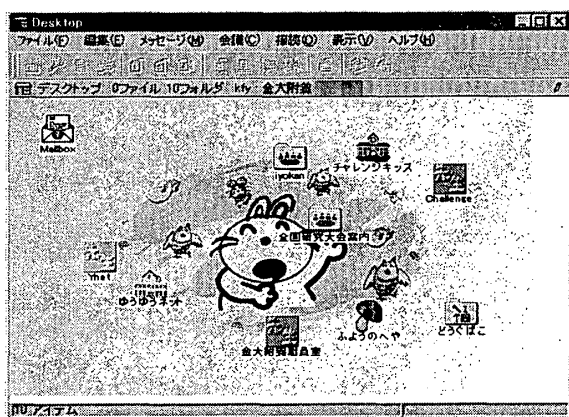


写真2 石川ゆうゆうネットのログイン画面

それぞれの会議室は以下のように位置づけられている。

- ・チャレンジキッズの会議室
児童生徒用：チャレンジキッズ
教員用：Challenge
- ・石川ゆうゆうネットの会議室
児童生徒用：ゆうゆうネット
教員用：Ynet
- ・金沢大附養専用の会議室
児童生徒用：ふようのへや
教員用：金大附養職員室

(3) 現状と課題

このような形で、2001年度に金沢大附養にサーバーを設置し、まずはチャレンジキッズへの参加（ユーザーIDを独自に発行）と地域用・校内用会議室の試験的利用を開始、そして2003年度には七尾養も参加しての石川ゆうゆうネット本格運用開始となったわけであるが、いくつかの課題が

生じ、それが現在も残ったままとなっている。

まずは金沢大附養での校内利用に関してであるが、ここでは教員の利用、とりわけサーバーの利用目的として挙げた「学校教育データベースとして、校内での指導情報を蓄積すること」に関してなかなか進んでいない現状がある。ここで一番の障害となったのが、教員用のコンピュータ数が不足していることである。

近年、これまで先進的にコンピュータ利用に取り組んできた学校のみならず、多くの学校において教員1人に1台のコンピュータ整備がなされてきているが、金沢大附養では残念ながらまだ実現しておらず、ほとんどは教員が個人で所有するコンピュータに頼っている現状である。この点については、現在学内の備品等により機器の確保を進めているが、今後さらなる環境整備が望まれる。

次に、石川ゆうゆうネット利用促進に関してであるが、ここではさらに大きな壁にぶつかった。それは県内の公立学校が参加するネットワークのセキュリティ問題である。

現在サーバーソフトには、チャレンジキッズとの連携や、GUI環境などで児童生徒にとって親しみやすいインターフェイスを提供しやすいといった理由で、Firstclassという通信ソフトを利用しているが、これはTCPの510番ポートを利用するものである。

しかし石川県のネットワークでは、このポートが閉じられていて、使いやすい専用クライアントソフトでの接続ができない状態になっている。

この点では、すでに公立学校のネットワークで同じシステムを利用している他の自治体のケースなどを参考に、担当者との折衝をしていき解決はからなくてはならない。

5. まとめ

前述のように、課題は山積しながらも石川ゆうゆうネットは動きはじめた。今後はさらに発展を期すべく、現状ある課題を早期に解決していくとともに、他の学校や障害児学級への参加を呼びかけていくことが肝要であると考えられる。

<参考文献>

太田容次 (2003) 特別支援教育における情報活用能力育成を目指したカリキュラム開発と評価, 滋賀大学大学院教育学研究科修士論文.